

# ローザ

二〇一九年七月一九日 一六稿版 黒澤 世莉

Freiheit ist immer Freiheit des Andersdenkenden.

Rosa Luxemburg

自由とはいつでも、自分と意見を異にするものための自由である  
ローザ・ルクセンブルク

## ●人物

- |                |          |
|----------------|----------|
| 一／クララ・ツェトキン    | 六六歳 ドイツ人 |
| 二／ゾフィー・リープクネヒト | 四〇歳 ロシア人 |
| 三／ルイーゼ・カウツキー   | 五二歳 ドイツ人 |
| 四／フリードリヒ・エーベルト | 五二歳 ドイツ人 |

## ●場所／時代

- 一九二四年三月五日  
フリーデリヒスフェルデの墓地  
ベルリン ドイツ＝ワイマル共和国

## ●本編

＃一

そこはフリーデリヒスフェルデの墓地。

ゾフィーがローザの墓前に立っている。ルイーゼが現れる。

ゾフィー　ごめんなさい。ルイーゼ。私ばかりメソメソして。

ルイーゼ　いいんじゃない。泣きたいときは、泣けば。

ゾフィー　詩集、読む。リルケなんてどう。

ルイーゼ　いらない。

ゾフィー　でも。あなただっぺこらえているのに。

ルイーゼ　私。私がないをこらえているっぺ。

ゾフィー　だから。その。

ルイーゼ　ゾフィー。あなたが泣くのは構わないわ、噴水みたいにじゃんじゃん泣いたり喚いたりしたっぺ私はなんにも言わない。

でも、あなたに私の気持ちを決められるいわれはないわ。

ゾフィー　ごめんなさい。

ルイーゼ　先客がいるとは思わなかった。

ゾフィー　五年前が昨日のことみたい。一九一九年一月一五日、あの声、あの人波、やまない銃声。革命軍も義勇軍もご苦労なことに、雪が降ってたんだからお家に帰ればよかったのに。ベルリンの雪はかわいいものね。彼女、「こっちのひとは四季があるっぺ言うけど、ソーネチカ、みつつの季節しかないわよね、春夏秋冬だわ」っぺ笑った。私たちにしか分からない。ここにいるわ、彼女。

ルイーゼ　「私たち」っぺ。ポーランド生まれでしょあの子は。

ゾフィー　ごめんなさい、同じ雪国だから。

ルイーゼ　ポーランドはロシアのものだと思ってるんでしょ。

ゾフィー　ひどい目にあっぺ可哀想に。ローザ。

ルイーゼ　いいかげんメソメソしないでよ。

ゾフィー　泣いていいっぺ言っぺたじゃない。

ルイーゼ　人の心は移りにけり、よ。

ゾフィー そうやって見殺しにしたのね。

ルイーゼ なに。

ゾフィー その移り気な心とやらで、ローザ・ルクセンブルクも、私の夫も、カール・リープクネヒトも見殺しにしたのね。

ルイーゼ 自分が何言ってるのか、分かってるの。

ゾフィー ルイーゼ・カウツキー、カール・カウツキー夫妻が何してくれたっていうの。

ルイーゼ やめなさい。

ゾフィー 二人が追い詰められていたのに、見て見ぬふり。

ルイーゼ やめて。

ゾフィー 義勇軍には飼いたい犬みたいに尻尾を振って、

ルイーゼ やめて。

ゾフィー 高いところから偉そうに物を言うけどなんにもしてくれない。間もなく引退してご隠居生活ですか、生きているって素晴らしいわね。

ルイーゼ やめてって言うてるでしょ、

＃二

クララが現れる。

クララ うるさい。うるさい。ここをどこだと思ってるの。

ゾフィー クララ。

クララ あははは。元気で何より、ゾフィー久しぶり。

ルイーゼも、会えて嬉しいわ。

ルイーゼ クララ・ツェトキン、ご無沙汰してます。

クララ ご主人はお元気。お子さんは。

ルイーゼ おかげさまで。

クララ 五年も経つと、こんなものかしら。寂しい気もする

し、居心地がいい気もする。でもやつぱり寂しいね。

ゾフィー 命日には、たくさんの人が集まりましたよ。

ルイーゼ 埋葬の日ほどじゃなかった。あの日はすごかったわ。何十万人もローザのために集まって、行進して。

クララ そうそう、くたびれたわ。

ルイーゼ あなたなんにもしなかったじゃない。面倒なことは全部、私とゾフィーでやりました。

クララ ご苦労様、ありがとう。あはは。今日も世話になるよ。

ゾフィー うちにお泊りになるの。

クララ 労働者の味方、共産党の同志だろう、ゾフィー・リープクネヒト。まさかブルジョワの味方、社会民主党のカウツキー先生宅にお願いは出来ないよ。あはは。

ゾフィー もちろん大歓迎ですけど。

ルイーゼ 政治屋さんときたら右から左まで、浮世のことには頓着ないんだから。

ローザは違った。頭が切れただけじゃない。目立たないでも必要なことに気を配ってくれたし、なにより礼儀正しかったわ。それも虚礼じゃなくて、真心がこもってた、だからみんなあの子のことが一発で好きになった。

クララ そうかい。気むずかしい、壁のある、口ばかり達者なちびの女。おまけにびっこでユダヤ人。あんたたちはそう言わなくちゃ。

ルイーゼ 皮肉ですか。

クララ ローザ・ルクセンブルク。カール・リープクネヒト。レオ・ヨギヘス。みんな私より先に死んでしまった。帝国は倒した。あと一步でドイツ革命は成功して、共産主義国家が誕生したのに。覚えてるか、あの子が死ぬ前日に書いたローテファアーネの記

事。

「私はかつていた。私は今もいる。私は今後もいるであろうと」。

まるでつきり遺言じゃないか。

あの日のお花の量といたら、あの子が見たらうつつりしてこう言ったでしょうよ、「クラレチカご覧なさい、まるで天国みたいね、色とりどりの花束がお祭りみたい」って、なんだか花の名前を並べるんだらうね、私はバラと。バラくらいしか分からないけれど。

#三

エーベルトが現れる。

ルイーゼ エーベルト閣下。

エーベルト おはよう。ルイーゼ・カウツキー。ゾフィー・リープクネヒト。クララ・ツェトキン。

クララ ドイツ共和国の大統領閣下が、革命家の墓参りとは。

エーベルト 公務でなければ問題あるまい。

クララ どうしてローザが死んだのかご存知無いようだ。

エーベルト ザクセン人は粗雑だな。

クララ いますぐここから消えて失せろ。

エーベルト 私がいると不都合なことでもあるのか。

クララ 不愉快なんだよ。

ルイーゼ クララ、エーベルト閣下、ローザの墓前です、自重して下さい。

ゾフィー 人殺し。よくものこのこと顔を出せたわね。

危険分子だとでっち上げて、何の罪もない主人と親友を汚いやり方で殺した。ベルリンを埋め尽くすような二人を殺せつ

てビラにも、当局はなんにもしてくれなかった。あなたが殺したよ  
うなものじゃない。

何とか言いなさいよ。

エーベルト あの二人は内戦を先導し共和政府の転覆を謀った。労  
働者の生活を守るためだ。

ゾフィー ごまかさないうで。

クララ 同じ左翼に同胞が殺されるとは、夢にも思っ  
てなかつたよ。

エーベルト 同じ左翼にこれほど足を引つ張られるとは、夢にも思  
わなかつたよ。慣れたがね。

クララ 世界の社会主義者の代表、かのカール・マルクスのお  
膝元、ドイツ社会民主党も今は昔。ブルジョワの手先に成り下がっ  
て、革命を弾圧し、戦争に賛成し、まるで右翼の集まりね。

エーベルト 大統領になつてから、左翼からは残虐な国粹主義者と  
呼ばれ、右翼からは血に飢えたアカと言われる。いったい私は左翼  
かね、右翼かね。

ルイーゼ 立派な社会主義者ですよ。大戦のあと、内乱とインフ  
レでめちやくちやなこの国をまとめあげているんです。外国からは  
気違いじみた賠償金を要求され、国土を狙われて。心から尊敬して  
います。

クララ ローザを殺した男だよ。

ゾフィー あなたが革命を弾圧しなければ、もつとマシな世の中  
になつてたわ。

エーベルト あの革命が成功していたとしても、ローザの思い描く  
理想郷が出来たとは思えん。

クララ 殺すことはなかつた。

ルイーゼ ローザはやりすぎたのよ。

ゾフィー 謝ってください。ここにいたいのならせめて、自分が

殺した人々に謝って。いまここで膝をついて。謝って。

間。

エーベルト 五年前、私はあなたの隠れ家を訪ねた、ゾフィー・リー・プクネヒト。覚えているか。なんのために伺ったのか。

取り下げただけか。私が人殺しだという言いがかりを。

クララ 無視よ。無教育なエーベルトが大統領まで上り詰めたのは、調整力と弁舌に長けてたから。

ゾフィー 分かっています。

エーベルト 隠れ家に伺ったあと、あなたとローザは激しい口論をしました。

あなたは夫、カール・リー・プクネヒトが社会民主党を離れることに反対だった。彼をそそのかしたローザを憎んでいた。

ゾフィー ローザは私の親友です。

エーベルト カール・リー・プクネヒトはローザ・ルクセンブルクの巻き添えを食って死んだ。

ゾフィー そんなこと、思っていない。

エーベルト 彼女はあなたの友人だった。友人だったからこそ、自分の夫が自分よりローザの話を聞くことが許せなかった。ローザが死んだと知って嬉しかったか。

クララ つまらない追い詰め方。優雅でもなければ男らしくもない。浅ましいハイエナ。

エーベルト ローザの墓前に立つ資格があるのか、ゾフィー・リー・プクネヒト。

クララ 失せろと言ったよ二度言わせるな。

#三の二

エーベルト ルイーゼ、あなたがローザをやれ。  
ルイーゼ は。

エーベルト あなたがローザを演じるんだ。

ルイーゼ ちよつと何言ってるか分からないです。

エーベルト そうだ。さかのぼってみようじゃないか。最後に彼女に会った日に。こちらのお嬢さんはローザに合わせる顔がないことを証明しよう。

ルイーゼ 無茶言わないで。

クララ あんた正気かい？

ゾフィー 私はローザの思い出と会いに来たのよ。

エーベルト ローザと会って、同じ口が利けるかな。

ゾフィー 喜んで抱きつくわ。

クララ 生真面目だからね、可哀想に。

ルイーゼ 激務がたたったんでしよう。

エーベルト 考えるな。感じる。

ゾフィー やるわよ！

ルイーゼ 無理です。

クララ 死んだ人間には会えないんだよ。

エーベルト はたしてそうかな。呼吸をするんだ。大きくゆつくり。身体を楽にして。想像しろ。想像しろ。ローザの顔、ローザの声、ローザの身体。仕草、口癖、笑い声。涙、ささやき、怒鳴り声。想像しろ、死の瞬間を。

#四

そこはエデンホテル。

一 エデンホテルのロビーから玄関までひしめく群衆



- 二 殴れ殴れ殴れという声
- 三 廊下から階段までひしめく群衆の中を駆け足が行き交
- う
- 四 ガガ軍靴の音ドドド怒号怒号
- 一 彼女が現れる
- 二 「あいつを生かして帰しちゃいけない」
- 三 飛び乗ってまず一発、
- 四 頭蓋骨が鈍く響く、背筋から力が引いていく
- 一 もう一発、
- 二 赤い液体が透明な液体が飛び散る
- 三 最後に一発、
- 四 膝から崩れ落ちるところを脇から持ち上げられ
- 一 ボロキレだ
- 二 裏切り者に制裁を
- 三 俺達の祖国を後ろから刺した売国奴に鉄槌を
- 四 ボロキレを車に放り投げ
- 一 軍人の誇りを取り戻せ
- 二 軍人の誇りを取り戻せ
- 三 ボロキレを二人で挟んで乗り込み
- 四 車はエデンホテルの前を出発する
- 一三 祖国万歳、帝国万歳
- 二四 祖国万歳、帝国万歳
- 四 三。二。一。ローザ・ルクセンブルク、おはよう。

井五

そこはローザの居室。

ローザ三 朝。目が覚める。最初にすることは、なにもしないこ

と。シーツにくるまって、そのすべらかさとあたたかさを味わう。顔を洗う、前に大きく伸びてごろごろして、ベッドから出る。着る服に目星をつけて、一気に着替える。ミミに朝のご挨拶、おはようミミ、今日は寒いねーとか暑いねーとか。ひとネコ一緒に朝食の支度。足元のミミが朝食を平らげる上で、私は人差し指まであたたかさが広がるお茶を飲みながら、頭の中で一日にすることの設計図を描いていく。まず庭のお散歩と、草木たちのご機嫌伺い。朝の空気を胸いっばいに吸い込んだら、「ノイエツァイト」のための論文の続きを書く。真つ白い原稿には無限の可能性が広がっている、なんてことは全然なくって、言葉の順番は限定された範囲でしかなくって。煮詰まってきた頃にグラシューをつくる。ミミと窓の外の小鳥を眺めながらランチを食べる。ミミ、彼らはごはんじゃないよ。後片付けをして、午後は翻訳の続き、ごろごろとロシア語をどんどんとドイツ語に書き換えていく。二二ページ終わらせたら時計を確認する。慌てて顔を洗ってお化粧をして、炭鉱労働者集会の演説の内容を諳んじながら身だしなみを整える。ノックの音が聞こえる。トントんと。トントんと。ノックの音が聞こえる。おしろいをはたく手を止めて鏡を横目にやり、ドアを開ける。

そこに私が立っている。

そこにあなたが立っている。

## ＃六

そこはローザの隠れ家。

エーベルト 五年前、一九一九年一月一〇日。ベルリン。

クララ      ローザが釈放されて二ヶ月後、死の五日前。

ローザがいる。ゾフィーがコーヒーを持って入ってくる。

ローザ三 おはよう、ソーネチカ。

ゾフィー おはよう、ローザ。よく眠れた？

ローザ三 牢屋よりずっといいわ。いい匂い。コーヒーを入れてくれたのね。

ゾフィー いまはこんなものしかないけれど。

ローザ三 外に出ないで買物なんて、神様だって出来ないわ。

コーヒーが飲めるだけ上等、上等。(よろめく)

ゾフィー (ローザを支えながら) ローザ。

ローザ三 大丈夫。

ゾフィー もう少し休んでいたほうが良くてよ。

ローザ三 休んでいる場合じゃないわ。

間。

ローザ三 カールに会いたい？

ゾフィー いいえ、大丈夫よ。

ローザ三 私はレオに会いたい。

ゾフィー ローザ。

ノックの音がする。ローザ、いなくなる。

ゾフィー どちら様ですか？

エーベルト フリードリヒ・エーベルトだ。

間。

ゾフィー 生憎存じ上げません。どちらをお尋ねですか？

エーベルト 茶番はよそう、ゾフィー・リープクネヒト。時間がない。

ゾフィー 人違いです。ゾフィーさんというかたはこの辺にはいませんね。私はアンナ・マチュケと申します。

エーベルト カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクを救うためだ。ここを開けてくれ。時間がない。

間。ゾフィー、ドアを開ける。

ゾフィー 嘘をついたことをお詫びします。

エーベルト 構わん。

ゾフィー なぜここが分かったの。

エーベルト アジトは全て分かっている。いつ、どこにいるのかも。

今日は私一人で来た。護衛はいない。

ゾフィー 信じられません。

エーベルト 表に出てみれば分かる。

ローザ・ルクセンブルクはどこだ。カール・リープク

ネヒトは。レオ・ヨギヘスは。

ゾフィー まずは私がご用件をお伺いします。それから

エーベルト 自分の夫を助けたくはないのか。

ゾフィー ここにはおりません、本当です。

エーベルト あなたは一人で二杯のコーヒーを飲むのか。

ゾフィー くそつたれ。

ローザが現れる。

ローザ三 いいわ、ゾフィー、

ゾフィー いけない、ローザ、

ローザ三 お茶をお願い。

エーベルト ローザ・ルクセンブルク、おはよう。

ローザ三 フリッツ、会えて嬉しいわ。

エーベルト 私もだ。

ローザ三 何年ぶりかしら。奥様はお元気。息子さんは。

エーベルト おかげさまで。

ローザ三 あら、雪が降っているのね。

エーベルト このバカげた革命をやめて社会民主党に戻って来い。

あなたが好きで散歩もできないベルリンをどうしてくれるんだ。監獄のほうがよほど安全だ。

ローザ三 あの素敵な牢屋より危険な国になっただなんて、政府はお昼寝でもしてるのかしら。

エーベルト 武力革命には反対していただろう。

ローザ三 私は魔法使いじゃない。民衆を革命に向かわせることも出来ないし、また革命に向かう民衆を帰らせることもできない。

エーベルト 武装蜂起をされたら、治安維持のために手を打たねばならん。

ローザ三 彼らは義勇軍の不当な暴力から身を守っているだけよ。情報の精度を確かめずに行動を選択するなんて、愚の骨頂ね。

エーベルト 十分な情報を集める時間がどこにある。

ローザ三 十分な検討を怠って下された結論ほど、自分を汚し貶めるものはないわ。

日和見主義のその場限りで舵をとっては、幽霊船のように難破するだけよ。

エーベルト 沈没するよりマシだ。あきらめろ。死ぬぞ。

ローザ三 革命を放棄した時点で、私は死んだも同然よ。

エーベルト だが死んではいけない。生きていれば、やがてあなたの

意志は労働者の力になる。

ローザ三 妥協した人間の主張はどんなに高尚で気高くあつてもその時点で軽佻浮薄に墮すわ。

エーベルト あなたの主義主張の価値が減じたとしても、あなたが消滅するよりはマシだ。

ローザ三 私の身体が減んでも、私の思想は滅びはしない。

エーベルト 労働者に権力を、か。いま必要なのは腹の足しにならん主義ではなく腹の膨れる腸詰だ。

いま目の前にいる労働者を救えず何の思想か、革命か。

ローザ三 革命は、明日できあがるパンではなく、一〇〇〇年二〇〇〇年後に大輪の花を咲かせる世界樹よ。

エーベルト 死後の自分を語るなど自己憐憫だ。

ローザ三 哀れな労働者が目の前で倒れてしまうこともあるでしょう。でも、搾取され倒れ死んでいったのは今までだって同じ、立ちつくしたまま死を待つか、前進して道を作って死ぬかの違いではない。世界革命こそが唯一労働者を解放する最善の手段よ。

クララ そうだそうだ。

ローザ三 現にロシアでは革命政府が樹立しているわ、レーニンに問題は多い、でも革命を断行したことは何物にも代えがたい勝利だわ。ドイツもあと一歩よ。

クララ 革命万歳。

ローザ三 労働者のための世界。すぐそこまでそれは近づいてきているわ。目を覆い、耳を塞いでも無駄よ。

エーベルト 死んで欲しくない。

オレは所詮仕立屋の息子で馬具職人だし、生まれついでインテリとは頭の出来が違う。党学校で出会った時、あなたは最高の先生で、こっちは落第生だった。生まれてからいままで、そ

の差は開きつぱなし、年を取るほど開くばかりつてわけだ。オレに出来ることは職人よろしく、目の前に起きたことにいちいち反応して出来るだけマシになるようにウロウロするだけで。

ローザ三 一針一針、しっかりと皮を縫い合わせるように学ぶあなたの姿は美しかった。労働者が宰相になる素晴らしい前例があった。ただったのは、偶然でもなんでもない。

エーベルト 他になり手がなかっただけだ。本当はあんたみたいな頭のいいひとがやる仕事なんだよ。ところが、あんたは遠い理想にメラメラ燃えて明後日の方を睨みつけちゃいるが、足元で死にかけて赤ん坊のミルクや、目の前のダルマになっちまった兵隊をどう食わすかなんてことは、まるで眼中に無いんだから。

亡命しろ、カールと一緒に。手を貸してやる。

ローザ三 もし私が亡命したら、労働者はなんと思うでしょう。安全なところから拡声器で声を張り上げる玉乗り道化師、大きな旗を空中で振り回しながら一輪車で遠ざかっていく曲芸師。ローザ・ルクセンブルクはそんな女だと思いませんか。それこそあなた方が望む事態でしょう。その手は食わないわ。革命

万歳。

クララ 革命万歳。

ローザ三 ブルジョワ議会を解散して、労働者に権限を委譲せよ。

クララ そうだそうだ。

エーベルト 残念だ。喧嘩相手が減る。

ローザ三 いつでもお相手するわ。

エーベルト こういう時代だ。あなたが生きていけるならば、私は死んでいるだろう。

七七

ゾフィー もうお帰りですか。お茶をご用意しましたのに。

エーベルト もう行かなくては。雪が積もる前に。

ゾフィー あら、これくらい、ロシアに比べればどつて事ないわ、ねえローザ。

ローザ三 そうね。どちらにせよ、また会いましょう。

きつと会えるわ、私たち。

エーベルト 信じるよ。信じる。さようなら。

エーベルト、いなくなる。

ゾフィー ローザ、追いかけてみましょう。

せつかくエーベルト閣下が来てくださって、あなたのことをこんなに案じてくださって、わたし台所で聞いていて涙が出ちゃったわ、こんなに真心のある人つてこの国中探したつてなかなか見つからないわよ。

クララ あはは。失礼。

ゾフィー 私の気持ちが分かっていただけたらね。

ローザ三 ソーネチカ、私の可愛い小鳥さん。あなたは政治のこととはなんにも分かってらっしゃらないのね。

ゾフィー すごく、すごく嫌な予感がするのよ。おとし兄が戦死した時もこんな予感したの、私のカン当たるのよ。

ローザ三 私は死にません、怖がらないで。

ゾフィー ちがうの、そうじゃないの。あなたは強い、あなたは立派、あなたは自分の運命に殉じて死ねるわ。カールもそう、自分が死んで世界が良くなるなら喜んで犠牲になる。

でもね。

ローザ、もう十分なんじゃないかしら。もう十分やつたんじゃないかしら。早かったのよ、ドイツに革命は。ロシアとは



違つて、まだ機が熟していないんだわ。どんなに立派な林檎の木だつて、秋にならなきゃ実は結ばない。あなたがどんなに立派な革命家だとしても、民衆がついてこなければ革命は起こらないの。

あなたは燃える蠟燭でいいだろうけど、勝手に燃えればいいだろうけど、まわりまで飛び火しちゃう。今死んだつてそれは無駄死によ。無駄死ににカールを巻き込まないで欲しいの。私のカールを奪わないで欲しいの。カールは革命家である前に、私の主人なんだから。

＃八

ルイーゼ　　ブタ。ブタよあんた。

政治家の妻でしょう、もつと誇り高くなさい。

エーベルト　ローザはそんな事言わないだろ。

ルイーゼ　　ブーブーブーブー「私の彼」つて。

クララ　　ローザよ、いま、ルイーゼ。

ルイーゼ　　そのくせあんたみたいのが、ローザの思い出を回顧録にしてひと儲けしてるんだから、怖いわね、女は怖いわ。

ゾフィー　　みつともない。

ルイーゼ　　はい。

ゾフィー　　自分が旦那とうまくいつてないからつて、八つ当たりしないですよ。

エーベルト　ローザは独身だ。

ゾフィー　　同じカールでもうちのとお宅のはぜんぜん違うわね。

クララ　　もう聞いてないね。

ゾフィー　　うちのカールは一本気、お宅のカールは移り気。うちのカールは貧乏人の味方、お宅のカールはお金持ちの味方。うちのカールは間違つたら素直に認めるおとな、お宅のカールは間違いを絶対に認めないこども。聞いてる人たちだつてね、カールカールつ

て、うちのだんなか、おたくのだんなか、髭のおつきんか、分かんなくなってるわよ。

エーベルト 聞いてる人などいない。

ルイーゼ 生憎うちのは現実主義でね、おたくのブルジョワ出身のおぼっちゃまとは違って童話を信じ切れなかったの。

ゾフィー ブルジョワって何。ジョア？

クララ え、このタイミングで？ 結構出てきたよ？

ルイーゼ 金持ちのことだよ。

エーベルト ちよつと違う。ジョアとはなんだ。

ゾフィー 一〇年前、一九一四年八月四日、ドイツ社会民主党の体たらくと言ったら。世界中がびつくりしたわよ。ドイツに戦争賛成の社会主義者がいるなんてね。皇帝とジョアにおもねって、平和主義の原則を根本からねじ曲げちゃうんだから。その犯人がそちらにおわせられるフリードリヒ・エーベルト閣下。にべもなく追隨したのがあなたのご主人、カール・カウツキー。戦争に負けて、賠償金をふんだくられて、領土をとられて、それがルイーゼの言う現実主義なの。あの日、ローザもうちのカールも、本当に本当にかっかりしてた。

クララ 私もだよ。

ゾフィー 怖いのは敵じゃないわね。ロシアでもフランスでもジョアでもない、同じ社会主義者だったんだわ。社会主義者が後ろから刺すっていうのは本当だったんだわ。

＃九

ルイーゼ、クララ、エーベルト、羊になる。

ルイーゼ ここで社会主義物語をお送りします。白い羊の群れと赤い羊の群れがおりました。

ゾフィー　ちよつと。

ルイーゼ　白い羊は大きくたくましく、すごく食いしん坊。赤い羊は小さくか弱く、質素に暮らしています。

ルイーゼ　白い羊の群れにおされて、赤い羊はちつちやく縮こまってました。でも、赤い羊の地道な努力があつて、数が増え始めて、白い羊に負けない群れになりました。

ゾフィー　何の話よ。

クララ　社会主義物語よ。

エーベルト　さつき言っていたな。

ゾフィー　受け入れ早すぎでしょ。

ルイーゼ　白い羊は言いました。「白い羊の王様は死んでしまいました。白羊も赤羊も、ヤギやシカに負けないように力を合わせましょう」

赤い羊は答えました。

エーベルト　「ずっといじめてきた私たちに、ずいぶん都合のいい言葉ですね。でも羊同士は仲間、力を合わせましょう」

そこに、狼があらわれました。

クララ、狼になる。

クララ　がおー。

ルイーゼ　狼は赤い羊に言いました。

クララ　「白い羊と手を組んじゃいけない。白い羊はきつと裏切る」

ルイーゼ　赤い羊は答えました。

赤い羊四　「だって羊同士で協力しないと、ヤギやシカに、おいしい草地在食べられちゃうよ」

狼一　白い羊は、結局君たちに草を分けやしないよ。分ける

ふりして、上前をはねるんだ。それよりも、ヤギくんやシカくんを力を合わせるんだ。

赤い羊四　そうは言っても、ヤギやシカとは話したことがないし、いつも喧嘩ばかりだし。

狼一　大丈夫、オレがみんなを助けるから。白い羊に騙されないで。他の赤い動物くん、赤いシカくんやヤギくんと仲良くしよう。そうしたら、みんな赤い動物になって、おいしい牧草がみんなに行き渡る。もう飢えて死ぬことはなくなる。いいかい、白い羊をしつかり見はっておくんだぜ。

ゾフィー　何これ。

エーベルト　社会主義物語だ。白い羊はブルジョワ、赤い羊は労働者、狼は革命家の比喩だろう。ヤギやシカはおそらく外国人だ。

ルイーゼ　狼は気づきませんでした。羊とヤギやシカが仲良くすることは、言うほど簡単ではないということ。赤い羊も白い羊も、羊同士で生きるほうがずっと生きやすいということに。狼は間違っていますでした。でも、少しだけ、早すぎたのです。

狼一　みんな、武器を取るんだ。白い羊にだまされるな。

赤い羊四　でも、そんなことしたら、白い羊に怒られる。

狼一　大丈夫、オレが君達を守る。

ルイーゼ　そう。いつでも狼は正しかった。あんたの旦那も狼、格好いいわね。でもね、狼には羊の気持ちは一生分らないのよ。赤い羊だつて、好きで狼から離れたんじゃないわ。狼があんまりたくましくて、駆け抜けていくから、ついていけなくなっちゃった。赤い羊四　大丈夫、僕達には僕達のやり方があるんだ。狼さんの意見も聞いて、白い羊と力をあわせて、おいしい牧草が一杯食べられるようにしようよ。

ゾフィー　気がついたら、青々とした草地は禿山に。羊はみんなお腹をすかせています。

ルイーゼ、本当に無理だったのかしら。あのとき民衆の波に乗っていたら。勇気を持って狼についていたら。エーベルト 何十万の人が死に、ドイツは滅んだだろう。

＃一〇

ローザ三 大好きなコブタさん。人を好きになる気持ちって、冬が春になるみたいに、私たちにはどうすることもできないの。あなたがカールを愛しているの、私よく知ってるわ。知っていますとも、ソーネチカ。それを身勝手だと笑うひとには笑わせておけばいいわ。

私の可愛いシマリスさん、あなたを悲しませるものは私が全部片付けてあげる。でも、わたしがあなたの邪魔ならば、あなたはあなたの力で、欲しい物を手に入れないといけないわ。あなたには二本の脚がある、その脚で立てる。二本の腕がある、その腕で掴んだり放ったり出来る。

そして頭がある、なにを掴みなにを放るのか、その頭で判断できる。

ゾフィー ローザ。あなたにとって私は、保護すべき雛鳥なの。馬鹿にしないで。私はゾフィー・リープクネヒト、誇り高い一人の人間、あなたと同じ一人の人間。同じ高さで私を見て。吐き気がする。

＃一一

そこはローザの墓前。

クララ ローザは驚だった。狼でさえ追いつけない。

エーベルト ルイーゼ、なかなか堂に入ったローザっぷりだった。

クララ せいぜいカラスね。てんでダメよ。

エーベルト いやいや、びつこの引き方なんか、瓜二つだ。

クララ ローザの肝心な部分がかかってないもの。

ゾフィー あのあとローザは出かけていったわ。まさかもう二度と会うことがないなんて、思わなかったから。

エーベルト 安心したか。

ゾフィー 観て分からないの。義勇軍とか言うゴロツキにぶん殴られて死んだ。可哀想なローザ。

エーベルト 次はもつと情熱的にやってみよう。それに論理的な知性が

ルイーゼ 次って何。

みんな帰つて。もう、うんざり。ローザを悼む気持ちのある人間なんて誰もいないじゃない。

ゾフィー 私はあるわ。

ルイーゼ だまれ。

ゾフィー カールとローザを愛してた。

ルイーゼ リルケと浮気していたくせによく言うわ。

クララ ええ。

ゾフィー 出鱈目はやめて頂戴。

ルイーゼ 旦那が牢屋に入っている間によくやっていたつてね。社会民主党の女性部では随分話題に上がってたわよ。

ゾフィー 私は愛してたわ。愛してるわ。そりゃ、すこし脇道にそれるようなことがあったかもしれない。でも、あなたたちだってそうでしょう。

ルイーゼ 愛とか言えばなんでも解決すると思つてるところも気に障る。

エーベルト ずいぶんと威勢がいいな、ルイーゼ・カウツキー。あなたはこう言った。ローザを狼に例えて、あんまり早く駆け抜けるから、ついていけなくなっちゃったと。彼女が私から離れていった

と。

ルイーゼ 事実を述べたまでよ。

クララ 大戦の前まではうまくやっていたみたいだけど。

エーベルト あなたはローザに、ついていけなかったのか。

それとも、ついていけなかったのか。

クララ あるいは、その両方か。

ルイーゼ 何も知らないくせに。

エーベルト あなたもゾフィーと同じだ。ローザを裏切り、それを忘れ、自己陶醉のためにここに来た。

ルイーゼ ここにテューブルがあつて。イギリス製、マホガニーのドロリーフ、今も昔もここにある、うちの家族の生き字引。一〇年前の我が家の居間。うちの三人の子供とローザの関係はすこぶる良好、良好すぎてローザのほうがうちの子のことを知っていたりするわ。ローザがお母さん兼お姉さんをやってくれて、私とカールは助かったし、あの子にとっても身寄りのないドイツ、ベルリンで親戚のように付き合える家族がいて。ダメ。

エーベルト どうした、いい調子だよ。

ルイーゼ 私はやつぱり、

クララ ほらご覧。

エーベルト 光ってる、今日一番光ってる。

ルイーゼ 二人の関係をあんたたちに見せびらかす気にならない。

ゾフィー よく言うわ。

エーベルト ここここに及んでは、あなたの意志など問題ではない。

ゾフィー ルイーゼだってローザの本で儲けてるのに。

エーベルト ローザをこの場所に呼び出すんだ。分らんのか、いまここに彼女がいるんだ、それは移ろう蜃気楼のようなもので、見

るものがいなければ存在しないし、また見るものが見たところできつ消えてしまいかわからない。

クララ 何を張り切ってるのよ。

エーベルト 必死でつなぎ止めないと、もう二度と現れない。

ルイーゼ 彼女は死んだ。

エーベルト 確かに彼女は死んだ。しかし、いま彼女は生きている。

クララ バカバカしい。

ゾフィー あなたなにしに来たの。

エーベルト 観て分かんのか。墓参りだ。これも墓参りの一環だ。

ほら、耳を澄ませろ。猫の鳴き声が聞こえる。

ルイーゼ ローザ、ミミが帰ってきたわ。

#一二

そこはローザの居室。

ローザ二 表に出て鼻から目一杯に空気を吸い込んで、止めて三秒、吐いて一秒。言うことを聞かない右足で軽快にステップ、よける私をあなたが支える。ライプツィヒの労働争議について歩きながらやり取り、あなたの意見には全く賛成できないけれど、またいくつかのひらめきをもらう。私はお話しが好き。春ならばあけつぽろげなタンポポ、冬ならば凍えるつぼみ、都会ならば薄汚れた野良犬、田舎ならば重荷を引く牡牛、いろんなお客さまとお話する私を、あなたは腕を組んだり、おしりをかいたりしながら見ている。

たくさんのひとが挨拶挨拶挨拶挨拶、一言一言を貰うたびに、石炭をくべられた機関車のように圧力が上がっていくのが分かる、今や私は出発を待つ超特急、あなたの合図で飛び出してい



くわ。あなたの合図で飛び出していくわ。

#一三

そこはルイーゼの家。

エーベルト 一〇年前。一九一四年八月六日。ベルリン。

第一次世界大戦、開戦から二日後。

ルイーゼ ローザ。

ローザ二 ルルー。

ルイーゼ ローザ。

ローザ二 ルルー。何よ、どうしたの。

ルイーゼ 交代。お願い。

ゾフィー ニエーツト。

クララ 仕方ないわね。よつしや。ルルー。

ルイーゼ ローザ。

ゾフィー ルルー。

ルイーゼ うん、ローザだ。ローザ。

ローザ一 気落ちしないで。明るく行きましょう。たしかに社会民主党の議員連中には目も当てられないわ。でも、戦争に強く反対する労働者たちのために、水先案内人をやらないと。

ゾフィー 不愉快。

ルイーゼ あなた、優しいわね。優しさって、強さね。

エーベルト こういうのは相性だ。

ゾフィー 黙れ。

ローザ一 さあ笑って、どうしてそんな顔をしてるのルルー。それじゃ人を殺すときの顔よ。本当に戦争をやめさせたいなら、表情から変えなきゃ。

ゾフィー みんな呪われればいい。

ルイーゼ あなたを見てみると本当に、未来には希望があるんだって、思える。でもね、ローザ。私の目には、多くの労働者は戦争に熱狂しているように見えるわ。

ローザー 私はそうは思わないけれど。

ルイーゼ 一五人の子どもを職人一人の稼ぎで養っている、惨めなアブラムシは毎日を生きることに精一杯で、考える余裕なんてない。

ローザー だから、私は戦うの。もうだまされることのないように、みなが物を学び、自分の頭で考えることが出来るように。自由な社会のために。

ルイーゼ 彼らは自由を求めてない、ましてや勉強なんて真つ平だつてツバはいてるわ。参政権だつて、どんなに必死になつて与えた所でドブに捨てるわ。

ローザー ルルー、私のヒナギクさん。あなたは私の最高のお友達。ドイツに来てからあなたと三人の子供たちのお陰で、どれだけ楽しい時間を過ごせたかわからないわ。覚えてる、初めてあなたと会ったとき、私マルクス主義の法王、カウツキー閣下のご夫人がエプロンをしてるなんて、つて卒倒しちゃったわ。

ルイーゼ そんなこともあつたわね。

ローザー ルルー、私のアイリスさん。私はカール・カウツキーとは徹底的に闘います。「ノイエツァイト」に書かれた彼の論文、読んだかしら。

彼はつまるところ平和主義を装つて、戦争に賛成しているわ。あなた気づいているわね、頭の良い方ですもの。

ルイーゼ 彼は戦争に反対しているわ。なぜ彼が汲々としているのか、あなたには分からないでしょうね。

ローザー 分かるわ。

ルイーゼ いいえローザ、あなたには分からない。あなたはオ

デュッセウス、海を駆け抜ける英雄、自分の戦争で哀れなトロイの民がどんな目に遭うかなんてお構いなし。彼らは必至で抵抗してくるけど、あなたの叡智に逆らうつもりは毛頭ないの。ただ、その場で自分の家族を守るのに精一杯なのよ。あなたは孤独、孤独は強さ、だつて守るものなんか何もないから。

ローザー 世界の労働者を守るわ。

ルイーゼ 自分のことは捨てられるわ、自分が死ぬ分には勇氣も出せる。でも子供は無理、捨てられない、捨てられるわけがない。私が死んだら、あの子たちの面倒は誰が見るのよ。そりゃ誰か見てくれるでしょうよ、赤の他人がね。でも、赤の他人が私以上に愛情を注いで、育てることなんか出来るわけない。

ローザー ルルー、私を見て。あなたの子供たちを守るために、私は妥協をしないの。

ルイーゼ より良い社会を後世に残すために。ハッ、ありがとう。くつて涙がでるわ。でもねえローザ、労働者をけしかけて

ローザー けしかけていない、自主的に

ルイーゼ ストライキを起こしたところで、結局困るのは失業する彼らなのよ。

ローザー 目の前の物事にとらわれなくて本質を捉えましょう。

一〇〇年二〇〇年、子供の子供の子供の子供の、そのもつと未来まで見通すのが人間の想像力でしよう。

ルイーゼ 足元がお留守よ。

ローザー ルルー、賢いヒヤシンスさん、あなた分かっているのよ、恥ずかしいからそんなことを言うのね。カールの行動を正当化するのよ、あなたの優しさね。

ルイーゼ 違うのローザ、そういうことじゃないのよ。

私たち人間には、生まれ持った枠組みというものがあ  
るの。あなたのように選ばれたひとたちは、その枠組みから逃れられ

る、それが自由というものだわ。でも私は、枠組みから逃れたいと思いはすれど、実際に自由を手に入れたって持て余すばかり。

分かってローザ、信じてローザ、人間は変わらないって、変わらないことを許して。生まれついた階級から、抜け出さないことを望む人間を許して。世の常識に縛られて、変化から逃走する私を許して。束縛されたい私を、命令されたい私を許して。他人の不幸に共感できない不感症を笑って。

ローザー 社会の仕組みが、エジプトの労働者を、インドの労働者を殺しているの。帝国主義と資本主義が結びついて、資本を求めらる猛獣となつて蠢いているからよ。私たちは等しく緩慢に人殺しなの。でも、私たちの意識を変えられれば、この獣の牙を抜くことが出来るわ。私はオデュッセウスではないけれど。

ルイーゼ 戦場に子供を送っているのは私よ。

ローザー ルルー、目を開けて。

ルイーゼ あなたは歴史に名前を残すわね。頭がいいだけの人間も、心が強いだけの人間もたくさんいるけど、その両方を持った人間は早死にするか出家するかよ。人間は汚くて愚か、矛盾と不純にまみれたドブネズミとして生まれついているんだから。さっさと死んで名を残せばいいわ。

#### ＃一四

エーベルト クララ・ツェトキン、完璧だ。

クララ 褒めて伸ばすタイプなんだね。

ゾフィー 私死ねなんて言わなかった。

ルイーゼ 陰湿な女。

エーベルト ローザの死を悼む資格があるとは思えんな。

ルイーゼ ブタ。ユダヤ人。

エーベルト 誰に向かって物を言っている。

ルイーゼ　ドイツ共和国大統領エーベルト閣下に。義勇軍で革命をつぶし、労働者を失業と飢えに苦しませ、外国に舐められてる、偉大な指導者様に。

エーベルト　撤回しろ。私はユダヤ人ではない。

ゾフィー　人種差別はやめて。

ルイーゼ　うるせー劣等民族。貞淑な妻を装って腹の底ではセックスと金儲けのことしか考えてないクズが。卑屈に見せかけて甘やかしてもらおうなんて奴はブタよ。分かったらさっさとロシアに帰れ。

ゾフィー　ローザもユダヤ人よ。

ルイーゼ　ローザはいいんだよ。

クララ　いつのまに民族主義者に転向したんだか。

ルイーゼ　あなたやローザに影響されて、進歩的女性を気取ったこともあったけど。人間、生まれ持った性質は変えられないし、違う階級、国家、人種、性別と共感なんかできっこない。わたしはあなたにも、あなたにも、あなたの過去にも共感しない。

ウンザリ。政治の話も何もかも、ウンザリ。

ゾフィー　分かるわー。

ルイーゼ　浮気者の泥棒猫は黙つとけ。

ゾフィー　はい？

エーベルト　確かに共産党にはウンザリさせられる。

クララ　元々の原則を踏みにじっているのはあなたたちでしょう。

ルイーゼは結局カール・カウツキーに従ってるだけじゃない。自立しなさい。いつまでも男に従うことないわ。あなたがカール・カウツキーから離れることを、ローザも望んでいたのよ。

ルイーゼ　ドイツでは革命は起こせない。右を見ても左を見て

も、右も左も自分たちが何をしているのか分かつちやいないんだ。  
このままゆるやかに滅びていくのよ。

先行きは暗いわ、ローザ。

＃一五

ローザ二 可愛いアカシアさん、わたしは大いにお説教をしますよ。まず、田舎に行きなさい。都会にいてはダメ。温泉があるところがいいわ、温かいお湯は身体も気持ちも、凝り固まったものをほどいて、自然な状態に戻してくれるわ。

次に、カールのこと、許してあげてちょうだいね。私も随分キツクいいましたけど、やつぱり彼の目の回るようなネクタイを思うとたまらなくなります。論文がいつも焼き直しばかりで、言動には致命的な欺瞞がある、でも彼はまじめでした。そしてあなたを愛していますよ。

最後に。あなたは、何があっても、私の一番のお友達。私があなを思っでなにかするよように、あなたはいつも私のことを一番に思っでくれるんだわ。これは間違いのないことでもあります。

あなたをたくさん抱きしめます。

ルイーゼ ユダヤ人が、私を許すつていうの。ブタ。

＃一六

そこは墓前。

エーベルト 弱いから、泣くのかね。女というやつは。

クララ 撤回しなさい。あんたも泣きながら生まれてきたのよ。

ルイーゼ クララ、あなたのローザ、言うほど大したことなかつ

た。

クララ 忠実に再現したわよ。

ルイーゼ 戦争が始まったときの憔悴っぷりはあんなもんじゃなかった。

クララ 私のほうが喚いてたよ。

ゾフィー 私は。

クララ どうしてローザを見捨てたの。あの子はあんたを必要としてたのよ。

ルイーゼ 思想を共有してたあなたには、決して分からないわ。

ゾフィー ねえ、私は。

クララ 帰る。これ以上あんなたちと馴れ合いたくない。

エーベルト 融通がきかない共産党員は。

ルイーゼ もう一回会わせて。もう一回会ったら、違う結末に出会えそうな気がする。

クララ ローザが哀れだよ。

ゾフィー 私はもつと人間臭いのが観たい。政治の話あきちやつた。

ルイーゼ 思い出すのは政治の話ばかり。

私の身体は滅んでも、私の思想は滅びはしない。

クララ 共産主義は滅びはしない。

エーベルト こういう勘違いをしている手合いが多い。

クララ ローザの遺志を継いでいるのは私たちよ。

エーベルト ソヴェエトの手下がよく言うな。

クララ では、あなたは。軍人と妥協して、右翼と妥協して、外国と妥協して、それでドイツはどうなったのよ。みんなが幸せになったの。飢えた人は減っているの。どんどん増えてるじゃない。

ロシアがあつた。革命を成してロシアに頼れば今ほどひどくはならなかった。ローザと目指した、労働者による労働者の

ための、搾取のない世界よ。

エーベルト レーニンのソヴィエトにどれほどの力があつたというのか。鎌と槌をかじって生きろというのか。

クララ ドイツでうまくやれば世界同時革命の波が広がった。そうすれば食料の心配もなかった。

ルイーゼ フランス人やイギリス人が、ドイツ人とロシア人の後追いをするなんてありえない。

エーベルト あなたたちの革命には希望が詰まっている。だがそれだけだ。政権をとつたあとの用意は何もない。ソヴィエトの言いなりになつて銃を持ち、無闇矢鱈と騒ぎ立てるのがローザの目指した社会なのか。世界同時革命。夢物語だ。

クララ 夢物語ではない、哲学よ。哲学がないところに人間は生きられない。

エーベルト 哲学でじゃがいもが増えるならいくらでも学ぶ。

クララ 花を楽しむ心、手料理を味わう心、だれかを大切に思う心。無駄に思える時間にこそ、人間性の豊かさは現れる。豊かな人間で構成された社会でなければ、生産的な行為、創造的な行為の効率は上がらない。

エーベルト いびつな理想主義だ。まったく科学的ではない。その行き着く先は、せいぜいが労働者による素朴な衆愚政治だ。あいつらはローザ・ルクセンブルクでもなければクララ・ツェトキンでもない。怠ける、羨む、蹴落とす、欲に目がくらむ、理想郷など不可能だ。あれほどの知性を誇った女が、なぜ革命なぞという下らんものを信じたのか。全く理解できん。

ゾフィー あなたがやったらいいんじゃない、ローザを。

エーベルト え。

ゾフィー そうすれば、ローザの気持ち分かるんじゃない。

クララ バカバカしい。



ルイーゼ　一七年前とかいいんじゃない、ロシア革命。ずいぶん興奮して帰ってきてたし。

ゾフィー　その頃よく知らないけど。

ルイーゼ　私は仲が良かったわ、あの頃が一番。クラナツハ街の彼女の家に毎日遊びに行った。怖気づいたの、エーベルト閣下。

#一七

ゾフィー　クラレチカ、ロシアは燃えていたわ。

エーベルト　もつとも牢屋は冷え込んでいたけれどね。

クララ　もうおままごとはやめて。

エーベルト　監獄も外も何も変わらないわ。私の身体や行動の自由は、権力が抑えつけられる。けれど思考の自由は誰にも奪えない。私の身体は縛れても、私の頭に入ることにはできないの。

クララ　エーベルト。無理があるわ。

エーベルト　なにかひとつの力で、ひとつの社会を奪取する、ということは、時間さえかければ案外簡単なものね。上から抑えつけて調教すればいい。サーカスのライオンと一緒に、寧猛に見えても、しつけられると大喜びするのよね。完全に抑えつけられてるのに、本人は自由な気にいるんだから。

クララ　ローザはそんなこと言わなかったわ。

ゾフィー　労働者の自覚を促すには、安心が必要なよ。不安で凝り固まつてるから、何を見ても聞いても疑う、ただ自分と同じ意見の話だけを聞きたがる。

クララ　そうよ。

エーベルト　まず感情的に寄り添ってあげないと。全力で肯定してあげること。そののち、ゆっくりと事実を提示していく、お腹を壊した子供に、おかゆを食べさせるようにね。

クララ　ちがう。

ゾフィー　春の種まきと同じ、焦ったつて仕方がない。せいぜい庭のお手入れをして、水を欠かさずやって、自分たちで芽吹くの待ってあげるのよ。

クララ　　そうよ。ローザ。

エーベルト　今や革命は東方より来りて、世界中の労働者が一挙に目覚める日が来るわ。

クララ　　記憶に残っている景色はいつも最高。忘れてしまうんだ、嫌なことは全部。そうでないと人間は生きていけない。エーベルト、いいわ。もう二度と思い出したくないことを、思い出そう。

#一八

そこはクララの家。

ルイーゼ　一七年前。一九〇七年八月二一日。シュツットガルト。第二インターナショナル第七回大会、最終日。

クララ　　私になにか言うことがあるんじゃない。

ローザ二　　すぐカツとなるのは悪い癖よ。

クララ　　あんたに言われたくないわ。

ローザ四　　ロシアで見聞きしたことはこれで全部よ。ペテルブルグはすっかり落ち着いちゃった。

ローザ二　　機が熟しきつていなかったのよ、未熟な林檎は渋かった。

ローザ四　　でも、私が見たところでは、いまでは革命のつぼみはそこかしこに見られるわ。五年か一〇年かもっと先か、一斉に芽吹くでしょう。

ローザ二　　当面の私たちの仕事としては、ドイツの惨状をなんとかすることね。

ローザ四　　本当にこの温度差と言ったら、どちらがマルクスの生

まれた国か分からないわ。

ローザ二　ロシアの同志に呆れられないよう、せつせと励みま  
しょうね。

クララ　コースチャのことよ。私が聞きたいのは。

コースチャのこと。

私の息子。

あなたとコースチャのこと。

まさか隠し通せると思っていたわけじゃないわよね。

私が聞きたいのは、あなたとコースチャのこと。

コンスタンチン・ツェトキンとローザ・ルクセンブル

クの関係。

ねえローザ。あなたの口から聞きたいの。

ルイーゼ　もういいの。

ゾフィー　知ってた。

クララ　ローザ。

ルイーゼ　まさか。

ゾフィー　見てるほうが面白そう。

クララ　ローザ。

それじゃ分からない。ローザ、それじゃ分からない

わ。

もう二度と会わないでちょうだい。

手紙もやめて。

うちの子をもてあそばないで。

ローザ四

違う。あなたに分かっていただけたらね。

クララ　ねえ落ち着いて考えて、あの嫉妬深い陰謀家、レオ・ヨギヘスが知ったらどんなことになるか。ローザ。

ローザ四　別れたの。

クララ　今なんて言ったの。

ローザ四　一人ぼっちなの。

クララ　そう。

ローザ四　コースチャを取らないで。

クララ　コースチャはあなたより二〇歳も年下よ。

ルイーゼ、ゾフィー　二〇歳。

クララ　うまく行きつこないでしょう。なぜレオと別れてしまったの、あんなに信頼しあっていたじゃない。それはいつなの。いつの話なの。だって、二人の家に住んでいるじゃない。そんなに急に。ドイツに帰ってから。そのもつと前から。

何とか言いなさい。

そんな態度でいる限り。絶対に認めないからね。

ローザ四　レオ。に。いいひとができて。

クララ　いつ。

どこで。

ワルシヤワ。あなたが刑務所にいる間。

フィンランドにいたとき。その前。

浮気。え、浮気でしょ。

言っちゃ悪いけどローザ、それ単なる浮気でしょ。

いやいや、ローザ、正気になりなさい。

許しておあげなさい。

ルイーゼ　女性解放運動家が。

クララ　男はしょうがないわ。

ゾフィー バレたら失業ね。

ローザ四 無理無理無理無理。無理よ絶対。

クララ コースチャとどうするの。どうなるの。未来なんか  
いわよ。コースチャでもいいなんて、あなた、それは軽率すぎる  
わ。ただそこにいた若く聡明で綺麗な男に手を出すなんて、そんな  
の進歩的でも何でもない。淫売じゃない。

ローザ四 母親だからっていじくりまわさないで。コースチャの  
母親だから私を侮辱していいの。秘密にしたのは謝るわ。だけど真  
剣よ。私もコースチャも真剣なの。

クララ なら、結婚なさい。

ローザ四 嫌。

クララ この。

ローザ四 あんなものくだらない、国家が管理するのに都合がい  
だけの決まりごとじゃない。私達の関係は法律で規定されるよう  
なものではないわ。

クララ 歴史上ずっと結婚制度が続いているのは、それが必要  
だったからではなく効率的だったからよ。

ローザ四 せいぜい二千年の期間で見ればね。あなたに分かつて  
いただけたらね。農耕が始まり資本の偏りが生まれる前まで、共同  
体内での人間関係はもつと広くなだらかなものだったわ。

クララ あなたは原始人じゃないでしょう。

ローザ四 過去から学ぶべきところは多い。

クララ それは社会全員が進歩的にならない限り無理よ。

ローザ四 それが革命でしょう。

クララ ねえ、本当に、正直な話をきかせて、ローザ。

あなた、本当はどうしたいの。あなたの正直な言葉が  
聞きたいの。

レオと一緒にになりたいの。コースチャと一緒にになりた

いの。

聞かせて、お願い。

ローザ四 レオ。

クララ コースチャと別れてもらうわ。

ローザ四 正直に話せばって言ったじゃない。

クララ あの子はいい子よ。残念だけど、ローザ。

ローザ四 クラレチカひどい。クラレチカひどい。侮辱だわ、ひどい侮辱だわ。謝って、謝って頂戴。

クララ 嫌よ。

ローザ四 二度と私の前でレオの話をしないで。

コースチャ、私のコースチャ、捨てないで、私を捨てないで。

クララ ローザ。

ローザ四 コースチャ、今日は何時に帰るの。次はいつ来られるの。

クララ さあ、もうこの話はおしまい

ローザ四 あなたに勧められてシラーを読んだ。ロマン・ロランの新作を貸してあげる。とっておきのグラージュを作りました。

クララ 飲み込みづらいかもしれないけど

ローザ四 ミミもあなたに会いたがつてる。抱きしめて、もつと強く。私のどこが好き。

クララ わたしはクララよ。

ローザ四 あなたの目が好き。

クララ ローザ、しっかりして。

ローザ四 背中。くちびる。手。胸。指。話。私のこと馬鹿だと思ってるでしょ。

クララ 離して。

ローザ四 でも私の事好きでしょ。

クララ いや、やめて。

ローザ四 馬鹿なところも可愛いつて言つて。

クララ 出ていつて、ローザ。

井一九

そこは墓前。

ゾフィー コースチャとは、その後どうなったの。

クララ 戦争で死んじまうまで続いたみたいだけどね。よく分からぬ。分かりたくもない。

ルイーゼ ありがとう、クララ。

クララ なんだなんだ、気持ち悪い。

ルイーゼ こういうローザ、知らなかったから。

ゾフィー ローザも私とおんなじね。

ルイーゼ ハッ。よく普通に付き合えたわね。このあと。

クララ 触れなければいいだけの話だから。簡単ではなかったけれど。

ゾフィー あなたはそれでよかったの。

クララ いいも何もないさ。理論はあの子に頼り切ってるんだ。ローザに借りがあるのよ。

ルイーゼ あなたが革命を続けるのは、ローザのためなの。クララ。

クララ まさか、私はそんな、ローザのためなんておこがましい。そう、でも、生き残ってしまったからね。

ゾフィー 彼女のこと、何か分かった、エーベルト。

エーベルト 幻滅した。クララ、あなたもただの女だな。

クララ 撤回しなさい。

エーベルト ローザがただのヒステリー女とは。

間。

クララ あんたにはそう見えたの。

エーベルト 信じられん。

ゾフィー 気持ちはわかるわ。いつでも誰でも、幻想を抱くものよ。

ルイーゼ それが裏切られたとき、頭では分かっているけど身体はついてこないのよね。

エーベルト 私を知ったふうに語るな。

ゾフィー あら。

ルイーゼ いままでさんざんご自分でなさっておいて。

クララ もっとさかのぼってみようか。あんたがはじめて彼女と親しく話した頃。ドイツ革命より、世界大戦より、ロシア革命よりも前。こんどはあんたの番よ、エーベルト。

ゾフィー これも墓参りの一環よ。思い出すといいわ。

ルイーゼ 呼吸をするの。大きくゆつくり。身体を楽にして。想像して。想像して。ローザの顔、ローザの声、ローザの身体。仕

草、口癖、笑い声。涙、ささやき、怒鳴り声。

クララ 想像して。三。二。一。

一二三 フリッツ。おはよう。

＃二〇

そこは学校の廊下。

クララ 一八年前。一九〇六年一月一五日。社会民主党党学校、ベルリン。

エーベルト 質問があります、ローザ。



ローザ一二三　なんなりと。

エーベルト　刑務所から党のカネで保釈されたのに、執行部に文句を言っているそうですね。

ローザ一二三　授業の話じゃないの。

エーベルト　駄目ですか。

ローザ一二三　構わないわ、社会民主党事務局長どの。

エーベルト　私は、あなたの党への功績を鑑みれば妥当だと思いません。何が不満なんですか。

ローザ二　私は誰の世話にもなりたくないわ。世の中の誰とも対等にお付き合いしたいの。党に買ってもらった自由なんてつまり、党に束縛されるのと同じことよ。

エーベルト　死ぬかもしれないわ。私には死ななかつたんです。

ローザ三　革命のために死ぬのなら本望だつたわ。

エーベルト　ローザ、それは困ります、私が学べない。

ローザ一　そうね。あなたを教育するために、私は生き延びたのかもね。

エーベルト　正直に言つて、あなたの主義にはついていきませんが、過激すぎます。ですが教育者としてのあなたは、本当に優れています。ですから、あなたが先頭に立つて民衆を煽るのは、やめてほしいのです。長生きして、もつと教育に力を注いでください。マルクスは二〇年前に死にました。フランス革命は一〇〇年前です。時代が違います。

ローザ三　十分な検討を怠つて下された結論ほど、自分を汚し貶めるものはないわ。

ローザ一　あなたが帝国議会に立候補しても、応援演説はお断りしないわね。

エーベルト　党内の派閥を越えて飛び回っているじゃないですか。

ローザ二　でもあなたは例外ね。

エーベルト ひどいや。

ローザ三 私たちは革命を起こす。一番単純で明確だわ。労働者全員が政治に参加できて、好きなようにモノを言う自由があつて、お互いいたわり合い慈しみ合う。私たち、考え方が真逆じゃない？  
エーベルト そうですね。

ローザ二 でも、うまくやれてるじゃない？

エーベルト ええ、まあ。

ローザ一 それが世界中に広がるの。どう、ウキウキするじゃない。ウキウキすることつて、とても大切なことよ。

エーベルト ローザ。あなたにとつて革命とはなんですか。

一二三 しあわせ。

ローザ三 世界中のひとびとが、一人残らず自由に生きるのよ。

ローザ一 考えただけでワクワクする想像じゃなくつて。

エーベルト ワクワクしているところを申し訳ありませんが、そんな未来は来ませんよ。世界中の人々には、つまり。自分で考えて決断するような、その、頭がない。

ローザ二 人間を見くびりすぎよ、フリッツ。ブタ扱いしないでほしいわ。

ローザ一 どんなに愚かなことをしでかしても、いつかはそれをバカだつたと気付くわ。

ローザ三 信じられなくてどうするのよ。労働者をブタ扱いする政治はブルジョワだけでたくさんよ。あなただつて本当は、

ローザ一二三 信じたいんでしょう。

エーベルト いや。それは。どうも。

ローザ二 フリッツ。目をつぶつてご覧なさい。想像して。

エーベルト はい。

ローザ一 何が見える。

井二一

エーベルト 焼け野原と痩せ衰えた浮浪児が。

この国は滅びるかね。断固戦うつもりだ。左翼には義勇軍を、右翼にはストライキを使う。あらゆる外国人に祖国を好きにさせない。ふざけたインフレをどうにかねじふせた。私はどう見えるかね。レーニンは死んだ。共産主義は死ぬのか。では、なにが生き残る。社会主義か、資本主義か、自由主義か、全体主義か、民主主義か。

ドイツのために何が出来る。フランスとの戦争か。また。馬鹿げてる。ポーランドを攻めるか。これもくだらん。いつそロシアを、いやありえんな。

とにかく、雇用をつくらんことには、飢えをなくさんことには。不用意な侮辱にいつまで耐えればいい。検討不足の素人考えをいつまで拝聴すればいい。ヒステリーと反対病に侵された国民は見捨てていいか。

いまでも虫酸が走る、ドイツ革命で皇帝が逃げ、勝手な連中に共和国宣言を出された。この国が共和国になるかなんになるかは、国民議会が決めることだ。規則に従わねば混乱が生じる、規律を守ることこそ平和な社会の礎だ。こんな簡単なことがなぜ分かんのか。

無理矢理に押し付けられた半死人を、それでも引き受けたのは、愛しているからだ。それも限界だ。無責任な不寛容に我慢ならん。体が持たん。だが、誰もいない。見渡す限りブタの群れだ。どこで道を違えたのか。

教えてくれ、ローザ。

井二一

そこはオリンピックピクスタジアム。

- 一 オリンピックスタジアムにひしめく群衆  
二 まだかまだかまだかという声  
三 座席から階段までひしめく群衆の中を興奮が行き交う  
四 ガガガラジオの音ゴゴゴ号砲号砲  
一 彼が現れる  
二 「民族の祭典の開幕」  
三 起立してまず拍手、  
四 スタジアム中に響く、下腹から力が湧いてくる  
一 大歓声、  
二 黄色い声援が鷹揚な声援が飛び交う  
三 最後に一喝、  
四 地面が割れんばかりの歓声を受け止め  
一 英雄だ  
二 愛国者に花束を  
三 俺達の祖国を力強く取り戻した感謝を  
四 英雄を車に見送って  
一 民族の誇りをこの胸に  
二 民族の誇りをこの胸に  
三 英雄は気高く挙手して起立し  
四 車はスタジアムの中を巡回する  
一二 総統万歳、帝国万歳  
三四 総統万歳、帝国万歳

そこはベルリンの街角。

- 一 東西に伸びる壁にひしめく群衆  
二 いまかいまかという声声声

- 三 西から東までひしめく群衆の頬に感涙が流れる  
 四 ビビビテレビの音ビビビビデオビデオ  
 一 壁が崩れていく  
 二 「念願の瞬間」  
 三 抱き合ってまずキス  
 四 世界中に響く、街から歌が起こる  
 一 大合唱、  
 二 年老いた歌声いとちいさき歌声が唱和する  
 三 最後に一発、  
 四 壁が崩れ落ち歓声はやまない  
 一 統一だ  
 二 国境線の隣人に握手を  
 三 俺達の祖国に永遠の平和を  
 四 名も無き人たちの抱擁は世界へと  
 一 壁は崩れ新しい世紀が始まる  
 二 壁は崩れ新しい世紀が始まる  
 三 名も無き人たちは衛星に駆け上り  
 四 映像は世界を駆け巡る  
 一四 統一万歳、統一万歳  
 二三 統一万歳、統一万歳

そこはエデンホテル。

- 一 エデンホテルのロビーから玄関までひしめく群衆  
 二 殴れ殴れ殴れという声  
 三 廊下から階段までひしめく群衆の中を駆け足が行き交  
 う  
 二 ガガガ軍靴の音ドドド怒号怒号

- 一 彼女が現れる
- 二 「あいつを生かして帰しちゃいけない」
- 三 飛び乗ってまず一発、
- 三 頭蓋骨が鈍く響く、背筋から力が引いていく
- 一 もう一発、
- 二 赤い液体が透明な液体が飛び散る
- 三 最後に一発、
- 一 膝から崩れ落ちるところを脇から持ち上げられ
- 一 ボロキレだ
- 二 裏切り者に制裁を
- 三 俺達の祖国を後ろから刺した売国奴に鉄槌を
- 二 ボロキレを車に放り投げ
- 一 軍人の誇りを取り戻せ
- 二 軍人の誇りを取り戻せ
- 三 軍人の誇りを取り戻せ
- 三 ボロキレを二人で挟んで乗り込み
- 三 車はエデンホテルの前を出発する
- 一二 祖国万歳、帝国万歳
- 一二 祖国万歳、帝国万歳
- 二三 祖国万歳、帝国万歳

#二三

エーベルト 信じるよ。信じる。さようなら。

#二四

そこはローザの家。

エーベルト ちょうど一九年前。一九〇五年三月五日。ベルリン。  
クララ 遅いよ何やってんの。

ルイーゼ クララがクジラを買ってこいとか言うからですよ。

ゾフィー クジラじゃなくてペンギン。

クララ だって、ローザは動物が好きだから。

ゾフィー どこまで行つたの。

エーベルト フィンランドです。

ゾフィー えード田舎。

ルイーゼ え、手ぶら？

エーベルト 一〇マルクでペンギンが買えますか。

クララ うん、まあ、本気にすると思つてなかつたから。

エーベルト 冗談、だつたんですか。この二〇時間。

ゾフィー そういう、エーベルトさんの生真面目なところ、いいと思うなあ。

クララ レオとエーベルトは便利ね。

ゾフィー 優秀。

ルイーゼ 優秀。

エーベルト それでロシアのストライキの話ですが

ルイーゼ あんた仕事しに来たの？

エーベルト え？

ルイーゼ 今日がなんの日か分かつてんの？浮世離れしてる自分

カッコイイと思つてんじゃないの？

クララ ほらぼーつとしてないで、花持つてきて。

エーベルト あの、外にあるやつですか。

クララ そうよ。今度はイタリアまでおつかいしたい？

ゾフィー 何をどう飾るの。

エーベルト ちょっと、量が多すぎて運びきれません。

ルイーゼ ガタガタ抜かすな持つてこいよ全部。

エーベルト はい。

ルイーゼ あの新人り使えないわ。

ゾフィー 面白いじゃないですか。ひひ。

クララ そう言わないで、長い目で見てあげないと。

ルイーゼ クララはのんきでいいわよねー、私無理、賢くて鋭い人じゃないと。

クララ 私は買ってるんだけどね。

ゾフィー ルイーゼさんの旦那さん、まさにそんな感じですよ  
ね。

ルイーゼ そうね。

ゾフィー 憧れちゃうなー私もいい出会いがないかなー。

ルイーゼ こんどうちに来なよ、紹介するから。

ゾフィー やった。ビールはこれでいいですか。

クララ 足りない足りない全然足りない、倍は持ってきて。

ゾフィー ルイーゼさん、手伝ってもらっていいですか。

ルイーゼ 嫌。嘘だよーん。

クララ ローザ。

ルイーゼ アカシア

ゾフィー ロビーニア

エーベルト スミレ

クララ ローザ、早く。あなたのお祝いだよ。

ルイーゼ ハイビスカス

ゾフィー カタルパ

エーベルト ラベンダー

クララ 乾杯しよう。あんたと、あなたの革命と、人間の想像  
力と、世界と、未来と、ビールと、とにかくすべてのものに。

ルイーゼ ラン

ゾフィー アイリス

エーベルト ヒヤシンス

クララ 愛してるよ。お誕生日おめでとう。



エーベルト おめでとう。ローザ。

廿二五

ローザ一 熱狂、熱狂、熱狂、ビール、喝采、冗談、喝采、ビール、正論、反論、ビール、怒号、反論、ビール、怒号、冗談、ビール、ビール、ビール、喝采、喝采、喝采。

流れる汗を拭くより前に、囲まれる人人人垣に握手抱擁抱擁握手、労働者団結せよ、世界同時革命、インターナショナル大合唱。ホールにはキラキラキラキラ輝く瞳。街角にはキラキラキラキラ瞬く夜空。

火照った頬を夜風に冷まさせながら、身体的高揚感のあとに胸の奥からせり上がってくる精神的無力感を、ため息と共に吐き出す。呼吸は私を生き返らせる、何度でも何度でも生まれ変わる。

ローザ一二 追いかけてくる足音、振り向かず運ぶ脚、夏ならカエルの大合唱と、冬なら雪の音が囁く夜道。軒先で手を振って、あなたは歩いて行く。

ローザ一二三 明かりをつけて、清潔な部屋着に着替えて、机に向かつて、私の私である時間へようこそ。気まぐれなミミは足元で遊んだり眠ったり。本のページを繰る繰る繰る繰る、新しいもの古いもの、知っているもの知らないもの、好きなもの嫌いなもの、全部まとめて繰る繰る繰る繰る。

この時、私は世界、世界は私。すべてが信じられて、ひとつになる瞬間。私は信じる。信じる。信じる。感じる、感じる、感じる、明日が近づいてきている。未来はあなたの手の中に収まる。

夢、夢、夢とひとつづきの、現実。

明かりを消して、糊のきいたシーツに挟まれて、感謝感謝感謝、気持ちのいいベッドを準備してくれてありがとう。

あたたかい。

エーベルト おやすみ。

おわり

上演にあたって

上演許可は左記までお問い合わせ下さい。

合同会社 Level 19

電子メール [info@level19.net](mailto:info@level19.net)

発行元 黒澤世莉 二〇二二年七月三日